

## 山綺水麗、騷人雅客来遊の地

### ―『鶴湖唱和集』に詠まれた

#### 東金の原風景―

爨 殿武

本日は、お集まりいただき、ありがとうございます。

まず、演題について説明をさせていただきます。「山綺水麗」は、文字の意味から何となく想像できますが、山がきれいで水も麗しいという、きれいなところです。次は「騷人」というのは、もともと漢文の意味では知識人とかインテリの人という意味で、文人を意味しています。「雅客」というのは風流を解する人を指しています。「山綺水麗、騷人雅客来遊の地」というタイトルは、私の造語ではなく、『鶴湖唱和集』の序の中に書かれた言葉を引用させていただいたものです。

ただ今私の専門は近代文学、特に明治・大正時代の比較文学であるご紹介いただきましたが、私の関心を持っている夏目漱石と魯迅という作家は、若いときに漢文と漢詩を勉強していて、漢文と漢詩を残しました。その関係から、私も普段、明治期の漢詩に興味を持っており、ある偶然の機会に、東金の八鶴湖を詠う漢詩集があるということを見つけたので、今日それをテーマに、お話をさせていただく次第でございます。

ちょっと話がずれますが、観光立国という言葉が最近よく新聞等で騒

がれています。千葉県は「観光立県」という政策を打ち出して、県の観光資源をPRしています。日本は一昔の技術立国から今度、観光立国という時代に入ってきたのですけれども、海外で知られている自然の景観と言いますと、富士山とか、日本三景とかがあります。外国人が日本へ観光に来たら、まず富士山を見たいそうです。やはり富士山の知名度が抜群ですね。

自然景観のほかに、日本の技術力が非常に優れていて、新幹線とか、秋葉原の電気製品とか六本木ヒルズや東京タワーとか、そういう人間の手で作られた近代的な文明も観光客にとって魅力のあるものです。

さらに、日本文化に絡んでいるもので、温泉とか日本料理とか歌舞伎とかお寺とか神社とか、または浅草に代表されているような日本の伝統は、外国の観光客にとって非常に魅力を感じるものですね。

それでは、千葉県の観光資源は何があるのだろうか、観光協会のホームページを見ますと、いろいろ紹介されていますが、残念ながら東金周辺の名所があまり出てこないんです。せっかく八鶴湖があるのに、どうしてあまり紹介されないのだろうかという不思議に思うので、この公開講座をきっかけに、みなさまと一緒に八鶴湖周辺をもうちょっと考えてみたいと思います。

一昨年に、八鶴湖と中国の杭州の西湖を比較して、一度お話をさせていただきました。いただいたのですけれども、そのときにこの漢詩集に少し触れたのですが、あまり詳しくご紹介できませんでした。今回は「房総と歌ごころ」というテーマのシリーズ講座ですので、漢詩集の中に当時の風景、また当時と今を比較して、何が変わったのか、あるいは、当時この東金がどういうふうな認識されたのかということをお話させていただきます。

きたいと思います。

実は、八鶴湖という地名、あるいは東金という町を江戸の漢詩人たちに知らしめたのが『鶴湖唱和集』の巻頭の漢詩です。

『鶴湖唱和集』に関しての基本情報を説明させていただきますと、本学図書館に明治期の初版本が所蔵されていますが、虫食いが結構多くて表紙も取れています。幕末の天保一〇年代から明治二〇年代にかけて、中央と房総の漢詩人たちが八鶴湖を詠んだ漢詩集です。明治二三年八月、齋藤夏之助が編集出版したものです。齋藤夏之助は、上総の国の山邊郡正気村の出身です。『鶴湖唱和集』は木版刷り、縦書きの半紙本です。発売元の書肆は能勢嘉左衛門という人で、皆さんよくご存じの多田屋の二代目のご主人です。

この漢詩集の実物は貴重本で、今日持つてこれないんですけれども、全体のイメージを理解していただくために、写真のデータを持って参りました。このように、漢詩と絵があります。最初に遠山雲如の詩があり、この詩がきっかけとなって、この詩集が出来たわけですが、その後には序文があります。この詩集の成り立ちについて、序文で三人が説明しています。

『鶴湖唱和集』は、本学の図書館も所蔵していますが、僕が手元に持っているのは、本学が所蔵していることを知る前に千葉県立中央図書館で見つけたもので、これとは別に、一九八〇年代にこの漢詩集が再版されたと聞いておりますが、実物は見たことがありません。

まず、序文から見ると八鶴湖の風景を見てみたいのです。最初の文は「湖在上總山邊郡東金駅、三面環山、水光與樹色映發如画也」とあります。この漢詩集は明治二三年ですから、当時、東金の鉄道が当然出来て

いないんですね。だから、東金駅というのは、これは決して今の東金駅ではなく、当時いわゆる街道に設けられた宿場です。八鶴湖は三面に山に囲まれていて、水と光と、それから木の色とがお互いに映って、まるで南画の絵のようだと言っています。

「文人墨客過其地者」、要するに当時の漢詩人たちでこの地を通る人たちがいつも「湖上亭」に泊まるというふうになっているのです、その周辺の宿屋に泊まる。そのときに詩歌、題詠がある。「梁川星巖律句尤膾炙人口。「和者」というのは、要するに唱和する者が数十人いると。まず、岡本監輔という人がこんなことを説明しています。

次の序文ですけれども、読んでいきますと、「山水之勝、待人而顯者、不一而足。近時頼山陽之於耶馬溪、齋藤拙堂之於月瀬、其最著者也。梁川星巖之於八鶴湖亦然」とあります。「湖在南總東金之郭外、為總中之一勝區矣。先是絶無知者」と続きます。ここで注目していただきたいのが、いい景色は人を待つて現れるという考え方です。要するに有名な文人がそれを紹介したからこそ景色が世に現れ、人々に知れ渡るといふことですね。梁川星巖がこれを紹介したために、文人がみんな集まってきたということになります。

ここで二つ、例を出して自分の観点を立証しています。一つは頼山陽と耶馬溪の関係です。耶馬溪は、大分県の西北部に広がる日本最大の溶岩台地で、奇岩や絶壁の溪谷が各所に見られ、文政元年（一八一八）、頼山陽が当地を訪れ、耶馬溪と詠じてから、世の中に知られて、みんな見に行くわけですね。

次に齋藤拙堂の月ヶ瀬と言っていますが、月ヶ瀬は奈良県添上郡にあり、木津川の支流名張川に沿った峡谷で、約六〇〇本もある梅林が美

しい名所となっています。この二つの名所が当時有名人に紹介され、文人たちが集まって観光しました。それと同じように、梁川星巖が八鶴湖を紹介するのも、まさにこの二つの景勝地と全く同じことだと言っているわけです。

さらに、今度は齋藤夏之助が書いた序文です。この序文は、やや長いのですが、皆さんのお手元の資料に添付してありますので、読んでみます。

「吾總南之地、山綺水麗、特占東瀛之勝、於是騷人雅客來遊者極多矣。柳雖有奇壯秀靈之境、不遇才人君子則其名前不彰。雖才人君子不遇奇壯秀靈之境、亦不能以據其胸臆、二者未嘗不相待也。東金有一勝區、曰八鶴湖。山皆青黛層層環抱、其間水波激瀾如鏡光、緑之相映、綺縮繡錯、宛然圖画、而枕湖有琳宮、有亭館、有古城、有仙女祠、以點綴天然之景致、盖山水之靈秀於此者也。」周りの景色を絶賛しているわけです。この序文の中で言っていることが果たして事実かどうか、この文章だけでは分かりません。それで、別の文章をちょっと見てみて、別の角度から検証してみたいと思います。一昨年に、本学の美術館で展示された『八鶴亭記』という掛け軸があって、全部漢文で書かれています。非常に興味を持って読んでみましたら、実は『八鶴亭記』というものは、八鶴館が出来たときに地元の名士安川柳溪という人から寄贈された漢文です。

この中に、八鶴館が出来たところの歴史が述べられています。その文章1「東瀛之勝」というのは、要するに日本の中の景勝地、または、日本の景勝地の中で最も勝るものだという意味です。ちなみに、漢文を書く時、特に序文を書く時に、大げさに褒めるといのが昔の文人の習慣です。

をお手元の資料の「序文から見る八鶴湖の風景」の四番に全部載せています。この文章を読むと、ほかの人が八鶴湖の周辺の風景をどういうふうに見ていたのかというのを理解できると思います。作者の安川柳溪という人は一八一九年から一八九八年まで生きた方で、名前は「維礼」、恐らく「これのり」と読むかと思えます。号は柳溪で、福俵村出身の方です。

安川柳溪は、少年時代から、学問に励んでいて漢文を習得した一方、武芸にも非常にたけています。一九歳のときに飯田家に逗留していた江戸の画家、高久靄崖という人に師事して、絵を習いました。また、遠山雲如や大沼枕山とも親交を深めて、江戸の梁川星巖を師と仰いだことがあります。この方は明治四年に福俵村の戸長になりましたが、間もなく辞職して絵に専念するようになったと伝えられています。

明治七年、五五歳のときに千葉県から修史委員に任命されて、三年がかりで上総の国の歴史を書きあげ、全六巻を完成させました。この人は、また南総を旅行した記録があって、南総各地の見聞筆記を残しているそうです。紀行文も漢詩集も残っていると同時に、絵が幾つか残っています。この人が八鶴湖の周辺の風景をどういうふうに描いているのかを見ていただきたいと思います。

まず、「八鶴湖者、吾南總之勝區、鴨嶺環抱、其形似括囊」とあります。八鶴湖は、やっぱり有名な景勝地で、周りに山があって、形が袋のようだと言っています。

次に「西北對鴉嶺、鶴湖東南則平疇萬頃、遠近村落歴々在于眸裏」というふう書いてあります。八鶴湖の西北は山があって、八鶴湖に面し

ているわけです。東南のほうが、すなわち田んぼなんです。非常に広い面積の田んぼがありました。八鶴館の上に立つと、遠近の村落は全部目に見えたそうです。

「若夫花柳媚春、藻荷動涼、新霜染樹、碧水拭鏡、凍雲篩雪、平野敷玉。凡四時之佳景、靡不備焉此地」とあります。ここで「花柳」という表現が出てきました。これは、いわゆる花柳界の花柳ではなく、「花」というのが恐らく春の花、「柳」が柳です。実際の景色を描いています。

要するに、春になると花が咲いて、柳の枝も新芽を吹き出して非常に美しい。夏になると水草があつて、それから、蓮がいつぱい生えてきて涼を動かすと、冷たい風が吹いてくる。秋になつてくると霜が下りて木を染める。碧い水が、湖面の水がまるで鏡を拭いたようにびかびか光っている。

「凍雲」というのが冬の季節に、寒い雲が雪をふるい、つまり雪を降らすということです。「篩」というのは、例えば粉かなにかを篩にかけて、ぱらぱら落ちてくるような、そういう感じですね。「平野玉を数えるごとき」というふうに、およそ四季折々の景色があるわけですね。四季折々の景色、あるいは時間ごとに異なる美しい景色がすべて備わっている。

つまり、昔、八鶴湖というところは一年中楽しめる場所だったので。一年中、それぞれの景色があつて、それぞれ面白い趣のある場所なのでですね。

これは先ほどの『鶴湖唱和集』の巻頭の絵です。八鶴湖の景色は昔と今とで随分変わりましたので、今日は、漢文や漢詩を通して皆さんと一緒に頭の頭の中で、当時はどういう景色だったのか、景色を頭の中で再現し

たいと思います。皆さんは、たぶん八鶴湖に足を運ばれたことがあるかと思いますが、おそらくその周辺の地形もご存じだと思います。大体、当時と今とでどこが違うかといいますと、まず、八鶴湖の入口に一本松という松がありました。その辺に高い岩があつて、上に松があります。この松は現在消えて、なくなりました。

この辺りは、八鶴館のような建物がありますね。ここに現在もお寺があります。この右の辺に西福寺があります。ここに家が少しあります。ここには湖心亭というあずまやがあります。ここにちよつと出ていますが、僕はちよつと確認できません。この部分は恐らくもう、この辺を埋めたのか、あるいは、ここを全部切り開いたのか分からないですね。

とにかく、湖の周りは木がいつぱいあり、緑が多いですね。ここには書いていないのですけれども、今現在、東金高校なのですが、当時、女学校がまだ誘致されてない時期です。この辺は、木と雑草があり、ちよつと畑があります。もともと家康公が鷹狩りをしていた頃、この辺に休憩用の御殿が造られました。幕末には空き地になっていました。僕は前に県立図書館で明治期にそこで撮った写真を見たことがあるのですが、そこは空き地で雑草と田んぼが少しあるところ。その後、女学校が建てられました。

先ほど言った畑は八鶴湖から九十九里に向かう広大な平野です。この辺が現在、旧道の国道二二六号を含めたところが田んぼになっているところ、全部、田んぼで、「萬頃」と形容されているほど、非常に広い土地が全部田んぼでした。今現在はほとんど様変わりして、道路と商店街、それから住宅地になっています。

『鶴湖唱和集』は、明治二三年に出版されたものですが、この絵は恐

らくその直前に描かれたものでしょう。ちなみに、先ほど見ていただいた八鶴館の序によりますと、八鶴館が出来たのは明治一八年です。ここに落款が書いてありますが、明治一八年の中秋の前の二日となっていますので、八月二三日ではないでしょうか。この絵に描かれた館が恐らく当時新しく出来て間もないころの八鶴館ではないかと推測しております。

それでは、漢詩の中で風景がどういふふうに詠まれているのか、漢詩の鑑賞に戻ります。

「波光煙影晚模糊、抖擻紅塵一點無、貼水青荷垂岸柳、東金郭外小西湖」。

これは遠山雲如が詠んだ詩です。前にも触れましたように、遠山雲如は梁川星巖のお弟子さんで、この人は非常に豪快な人と言われています。本来、遠山雲如は、江戸に住んでいて裕福な家庭に生まれ育ち、幼少の頃、漢文と漢詩を学びましたが、花柳界の遊びが好きで、それで金をだいぶ使ってしまった、無一文になってしまいました。それで各地を転々として、私塾の先生として、漢詩と漢文を教えながら生活していたわけです。非常に豪快な方です。

この人が一宮の藩主、加納久徴と親交があり、東金周辺に来て、しばらく棲みついたのです。こういった縁もありまして、梁川星巖がここに来たわけです。それから約一〇年間、遠山雲如は、上総の各地を転々としたといえます。

この詩の中で「波の光」、それから「煙の影」、周辺がだんだん、だん

だん暗くなっていく夕暮れの風景を簡潔な言葉で描いています。夕方になつてくると、だんだん夕日が落ちていって、周りがだんだん暗くなっていく。炊事の煙が上つてきて、周りの影、あるいは煙が残しているような影、渾然一体となって、周りがだんだん暮れて見えなくなっていました。

そうすると、次は「紅塵を抖擻」して、「抖擻」というのが今、日本語でほとんど使わないのですけれども、中国語の中ではまだまだ使います。つまり、精神を奮い立たせるという意味ですね。ここでは、紅塵というのはちり、体を被っているちりとかほこりとか、そういうものを振り払って、体をばたばたして、ほこりを振り払って、紅塵が綺麗になくなりました。ちり一つもない。人間もそうですし、周りの景色もそういふふうに見えるわけです。

周りの景色がとにかく、だんだん暮れて暗くなっていくうちに、周りが非常にきれいになりました。「水に貼く青荷」、青荷というのは蓮です。その葉っぱが湖の水に付くか付かないか、非常に低く、周りの岸に柳の枝が垂れるというふうになっています。

これは全体的に景色を描いています。わずか四行の詩に時間軸と空間軸が同時に存在しています。八鶴湖の中の景色も周辺の景色も、この第一句から第三句で全部表現しました。夕暮れに湖の周りの景色がだんだん暗くなっていくうちに、景色がどんどん変わっていくという情景を、非常に短い言葉で全部表現しています。言葉の無駄は一つもなく、非常に素晴らしい詩です。想像する空間が非常に大きいように思われます。周りの景色がだんだん目の中に浮かんでくるような感じがします。

詩の最後は場所のことを述べています。東金の城郭の外に小西湖がある

と、画竜点睛のようにこの一句で結んでいます。要するに、この景色は中国の杭州にある西湖のサイズを小さくしたものだ、詩人は地上最高の景色である西湖という比喩で八鶴湖を讃えています。

中国の西湖は、恐らく当時の日本の漢詩人たちは誰も実際見たことがないところだと思います。みんな、いろんな詩を通して想像しているわけです。でも、それが文人の間で、みんな同じような価値観を持っているから、この言葉でまさに共鳴しているんですね。小西湖という表現は、皆さんの心に響いたわけですね。

次にこの梁川星巖の詩を見てみたいのです。梁川星巖は天保一二年に、東金に来遊して、自分の弟子の詩を読んだ後、一首唱和しました。梁川星巖に関しては既に非常に素晴らしい研究がありますので、ここでは説明を省きますが、詳しくは、鶴岡節雄氏の『房総文人散歩』をご参照ください。これも多田屋から出版された本です。

この本は残念ながら、『鶴湖唱和集』についてあまり深く研究されておらず、ただ触れただけで、幾つかの漢詩を取り上げたものの、ほとんど鑑賞はしてないのです。梁川星巖の詩は次の通りです。

「勝遊如此也應無。来倒沙頭隻玉壺。五月薰風長鰕菜。一生衮袍在菰蒲。」

山明水媚看逾好。扇影衣香興不孤。方悟雲如詩句妙。東金郭外小西湖」

前半は八鶴湖を景勝地として絶賛しています。「来たりて倒す」というのは、酒の壺を倒して、お酒を注ぐという漢語です。次は五月の風で

ですね。五月というと、当時、天保一二年で旧暦を使っていたので太陽暦より一カ月遅れるわけですね。だんだん、暑くなってきました。五月の風がいろいろな草花の香りを運んで、「鰕菜」というのは魚またはエビ料理を賞味しながら、一生、こういった景色の中にいて生活してみたこと。

「山明水媚」、山が明るくて水が美しく、眺めていていよいよ非常に素晴らしい景色だな。それから、ちょうど暑い時期ですので、うちわを使うわけです。ここで雲如の詩を読んでもみると、この詩が非常に素晴らしいと、やっとな悟ったのです。

最後に、遠山雲如の「東金郭外小西湖」を踏まえているわけですね。梁川星巖は当時、江戸で詩社を結成して、弟子を育てていますから、弟子がいっぱいいます。明治の有名な詩人はほとんど彼の門下生です。だから、明治期に入ってくると、門下生たちが梁川星巖のように、次々と八鶴湖にやって来て、遠山雲如の韻を踏んでいっぱい詩を書いたのです。

『鶴湖唱和集』の詩は全部この韻を踏んでいます。次は大沼沈山の詩を読んでみたいと思います。

「載酒間遊不可無。恰聞啼鳥喚提壺。波塘景物優於畫。函筆高低麗似蒲。」

烈祖殿空殘雨遠。靈妃廟古暮雲孤。四時宜賞殊宜夏。萬頃涼波現太湖」

このように、遠山雲如の詩と全く同じ韻を踏んでいるわけです。これ

は唱和といえます。相手の韻を踏むというのは敬意を表すということになります。

ここに文字の異同があります。当時、木版刷りですので、字が間違っているところが結構あります。この「間」というのが閑の間違いではないかと思えます。明治時代の本を読むと、閑遊という言葉が良く目にすることがあります。夏目漱石の詩集の中にもよく出てきます。「閑遊」というのがよく漢詩の中で使われる言葉です。

「酒を載せて」というのが、酒を持って暇があつてぶらぶらして遊ぶ。「不可無（なかるべからず）」というのは、まさに必要という意味です。鳥が鳴いているのを聞きながらそろそろお酒を飲んでお話をしましょうというようなことを言っています。

ここに「波塘」というのが湖のことを言っています。土手の景色は、絵より素晴らしいと。当時の普通の南画よりこの景色が優れていると言っていますね。「函筆（かんたん）」という字がちょっと難しいんですけども、函筆というのは蓮のことを指しています。蓮は高いのもあって低いのもある。「麗似蒲」というのは、「麗倚蒲」と書いてあるものもありますが、「倚」というのはちょっとおかしいんではないかと思えます。この字は「似」でないと、説明がつかないと考えられます。要するに、「蒲に倚る」というのは、蒲が非常に細長いものですから、寄り掛かることは不可能なですね。つまり、その蓮は高いものもあるし、低いものもある。水草という蒲に似ていて非常にきれいだ。

周辺は二つのお寺があつて、雨がだんだん小さくなっていく、遠のいていくと。この廟は非常に古くて、夕暮れの雲がだんだん一筋になっている。寂しい気持ちを描いています。「烈祖殿空残雨遠。靈妃廟古暮雲

孤」は対句になっています。

次は「四時」というのが、四季のことです。「四時宜賞殊宜夏」は一年中鑑賞することにはよろしいが、殊に夏がいいと。一年中鑑賞できる場所ですが、夏が涼しくて緑が多くて風の香りも良いというようなことを描いていますね。

「萬頃涼波現太湖」は「萬頃」、つまり広大な湖面の広さということを行っています。要するに、広いところに涼しい波が現れて、「太湖」というのは杭州の西湖の別名で、やはり遠山雲如の詩を意識しています。

これを見ると、八鶴湖は決して春だけ観賞するところではない。春だけ花を見るところではなく、一年中、むしろ夏に鑑賞するところなのだと考えられます。

次にまた、日高如淵という人が書いたものですが、この人については実は昔養老の滝かどこかでこの人を記念する碑をちらっと見たような気がするのですが、今回、少し調べてみたら、宮崎県出身の方で、江戸で勉強して藩政に関与した方だと分かりました。陸軍省の文官になったのですが、明治一八年に市原郡に移り住んでいて、そこで理想郷の建設を始めたという方です。多分、その関係で養老の滝周辺で記念碑建立されたのではないかなと思います。

当時は全く意味が分からなくて、簡単に見過ごしてしまったのですけれども。この方が実は『鶴湖唱和集』の中に漢詩を残しております。

「山光（水）如洗断雲無。風送荷香好倒壺。岸漸縮邊新築路。水繞淺處即生蒲。

双巖竝聳關堪閉。両寺相望勢不孤。志士経営待賓閣。東金郭外小西湖。

ここは「山光」となっていますが、恐らく「光」ではなく、「水」ではないかと思えます。「山光が洗われるように」と言うと、ちよつと中国語としてはおかしいので、木版刷りですから、「光」が「水」と似ているので、多分、間違つて彫られたのではないかなど。だから、山水が、この山と水がまるで洗われたように非常にきれいだ。

それから、「断雲」というのは、切れた雲が全くないというふうに言っています。風が蓮の香りを送ってきて、ここで「壺を倒す」ってまた出てきますね。壺を倒してお酒を入れるということですね。ちよつと、この自然環境の中でお酒を飲むのはぴったりだということですね。

岸がだんだん、要するに小さくなって新しく道をつくつたと言っています。新しく道を築いたと。水がめぐりて、浅いところには蒲が、水草が生えてくると。ここに双岩、二つの岩というのは先ほど一本松のところで触れましたように、対句になっていますから、二つのお寺が相臨みて、決して孤立しているわけではない。ここで「志士経営して客を待つ」というのは、八鶴館のことを指しているのでしょうか。要するに、志のある方がこの八鶴館を経営して、お客を待っているということになります。

ここは遠山の雲如の詩を踏んでいるわけですね。ここで新しく分かったのが、恐らく明治期だろうと思うのですけれども、この湖の周辺の道路が新しく修繕されたんですね。ここでちよつと写真を見たいと思います。

向かつて右のほうの写真ですが、明治四一年の夏の写真です。こちら側が、今、この男の人が立っているのが恐らく東金高校の側なんです。ここは西福寺です。西福寺の後ろの緑をご覧になってください。今の景色とちよつと違うのです。うっそりと森となっているというか、緑が非常に多いんですね。建物がほんの少し見えるぐらいですね。緑が非常に多いせいか、周りはこちらかというところとちよつと暗いという感じがします。

今度は、中の土手を映した写真です。ここは小さな神社というか、あずまやがあります。ここがまだ木が生えてきてないころなのです。今、ここはむしろ木がたくさんあるところですね。この辺が八鶴館です。今と全く違う雰囲気ですね。後ろが高いものがなくて、この後ろは全部田んぼです。

この二枚の写真は恐らく明治四〇年ごろの写真です。これは弁天さまの社ですね。当時は、東金八景というところ、両寺の晩鐘、夕方の鐘、湖畔の楼、お宮台の青嵐、小西湖の魚釣り、弁天島の秋の月、鶴嶺の夕宵、山玉台の帰鴉、城跡の暮雪というふうに言われています。

これは別の写真ですが、これはぜひ皆さんの意見を聞きたいのですが、今の高いところに立って、今でもボートがありますよね。今の高台に立ってみると、このボートの大きさがこんなに小さく見えないのですよ。僕は地理学の専門家ではないですが、どう見ても湖の大きさが今より広く感じるんですね。

この写真は西福寺側に立って、対岸を見た暮れの雪の景色です。今でもほぼ同じような景色が見えますけれども、特にこの辺りの舟があまりにも小さいのでびっくりしたんですね。八鶴湖は、こんなに広がったの

か、少し驚いています。

恐らく、先ほどの詩にも出ていましたように、最初出張しているところがあって、その周辺を埋めたんではないかと思えます。その出張しているところを削ったよりは、埋めたのではないかと個人的に思っています。

これは昭和二年のもので、東金町鳥瞰図です。この辺の松がさすがになくなったんですが、この岩がまだ若干残っています。

それから、ここは八鶴館があります。この辺は家が若干増えたような気がします。この辺の山が切り崩されて、家がだんだん増えてきています。この辺は全部家になっています。田んぼが全部改造されて家になっています。現在の旧道のほぼ原形が残っています。この地図の書き方は、昭和時代の特徴を現していて、現在の書き方と違って、一軒一軒の家の名前が全部表記されています。非常に面白いです。実はここに布施商店というのが出ています。今でも布施商店がまだそちらにあります。

ここが西福寺。西福寺の看板が出ていますが、西福寺の境内の中にお墓がほとんどないのです。これは、現在八鶴湖周辺の衛星写真です。この辺が明らかに全部切り崩されています。人家がなだれてくるような感じで、ばあっと一面に家が入りこんでいます。この辺が宅地開発されて、緑の削られている部分が目瞭然です。この辺は昭和時代の絵から見ても分かるように、緑が多いところがもう切り開かれて家が建っているんですね。

もしこの辺に住んでいる方がいらっしやると申し訳ないんですけども、決して批判しているわけではないのですが、人の家がどんどん景観の中に入っていくと、景色が結局変わってしまうのです。私たち人間の

生活がどんどん自然を浸食していく有り様は衛星写真から見ると一目瞭然なんですね。この辺も昔、家がこんなに多くないのですが、だんだん増えてきて、岩もなくなっただんです。

ここに学校が誘致されて、今、東金高校になっているんですけど、昔は女学校でしたね。ここは明らかに緑が切り崩されてしまっています。この辺が西福寺です。西福寺の中の段々畑みたいに墓石が並んでいますね。この辺の緑も崩されて、家が出てきて、この辺もだんだん家が上のほうへ行っただというの、この地図ではつきり分かります。

上から見ると東金高校の後ろの緑がまだ残っていて、先ほど「袋のようだ」というふうに言っているのですが、まさにそうです。昔の人は今のようになら見る視点がなかったはずですけども、昔の人の想像力、平面で見てもまるで袋のようだというふうには漢詩の中で詠んでいる。まさに、袋のようだという形は一目瞭然ですね。

このように、緑が崩されて、だんだん家が上のほうに迫ってきます。神社ももともとあったのですけれども、こういう斜面のところには家が建つようになりました。昭和二年ごろには、まだまばらですが、この辺の家はまだそんなに多くはないんです。でも、人間の開発の手がどんどんこの緑の森に伸びてきたというのが、これで分かります。

だんだん時間が迫ってきたのですが、最後に皆さんに申し上げたいのは、当時の詩や漢文から見えることは、景色がだいたい変わったこととです。柳から桜に変わり、桜の木が植えられることによって、確かに日本的な景色になったんですけれども、もともと一年中鑑賞できる景色が、春に限定されるようになってしまったと、僕はそう思っています。

要するに、今は東金の八鶴湖といえますと、桜の名所、夜桜が有名だと知られています。それはいいですが、それ以外の時期はあまり観光客が来なくなっていました。春になると、みなさんが集まってきましたが、しかし、春の桜の名所といえますと、東京でいうと千鳥が淵とか靖国神社、千葉というと、昭和の森などのように、いろんなところに桜の名所があります。八鶴湖周辺の面積は狭いものですから、昭和の森などの広いところに比べると、大勢の観光客を誘致することができなくなり、結局、周辺住民の方が夜桜を鑑賞するところになってしまったというわけです。これは僕としては八鶴湖の景色を考えて非常に残念に思うところです。僕も桜が好きで、決して桜を植えることが悪いという意味ではないのですが、ただ柳を切り、桜を植えることによって季節限定になってしまったというのが事実です。

あとは、この漢詩集の中に実はたくさんの水鳥が描かれています。当時、「鶴」とか「鷗」がたくさん詠まれています。ツルが恐らくいたと思うんです。カモメが海から飛んでくるというのは、どうだろう。事実かどうか定かではありませんが、当時の人がもしかすると、カモをカモメとして認識しているのか、あるいは、その鷗という言葉が大きな水鳥のことを言っているのか、その辺が定かではありませんけれども、詩集の中では鶴と鷗がよく詠まれているのは事実なのです。現在でいいいます。カモとか水鳥がいっぱいいます。

それから、蓮もなくなったわけですね。蓮がなくなったというのは、明治五年に板倉家が国替えされたときには、天罰が下されて蓮がなくなつたと言われているのですが、恐らく事実ではないと思うのです。『鶴湖唱和集』の漢詩を読んでみると、明治二三年前の漢詩はかな

りの確率で蓮が出てきます。だから、明治五年に蓮が一気にすべて消えたというのは、少なくともこの漢詩集を読んでは検証できないのです。

あとは、先ほど衛星写真で見えていたように、周辺の山が、三面に山の緑に囲まれたところは見事に一箇所が切り崩された。山林が切断されました。これは景観上、壺のような小さな庭のような景色が崩れてしまったので、光が全然違ってくるんですね。周りの雰囲気も、湖面の光も、中の雰囲気も全然変わってきたので、そこが多分、景観が随分違ったのではないかなと思います。

この民家が増加したというのは恐らく昭和の時代からではないかと思えます。旧道沿いの商店街の開発が全部、昭和二年の時点で、この東金周辺が上総の国のこの周辺地域の繁華街として栄えた時期に、どんどん人が集まって住むようになった。それにつれて、どんどん宅地開発されたのではないかなと思います。

お寺の中のお墓が増えたのも、やはりそれほど古くない出来事ではないかと思えます。考えてみれば、本来、江戸後期、明治初期にこの周辺に探勝的な風景があつて、江戸の文人の中で房総半島の景勝地の一つとしてよく知られていましたが、生活の風景が八鶴湖を浸食することによって、八鶴湖という名もだんだん人々の脳裏から忘れられてしまったと言えるでしょう。

現在、観光立国、観光立県という、今までの観光資源をかき集めて、例えば最近、波の伊八の彫刻が注目されるようになると、観光会社や観光協会は、それに便乗して、観光客を集めようと一所懸命になっています。しかし、それ以外の環境整備をほとんどやらないうちに感じられま

つまり、観光というのは、トータルでデザインをするときに、まず、トータルで景色とか、民俗文化とか、または近代的な都市とか、あるいは、九十九里地域の昔の漁民の方の生活とか、そういったものを再現して観光資源として開発する必要があるのではないのでしょうか。そういうトータルのデザインをやったり考えるべきであって、いつの間にか人間がどんどん、自然環境を切り崩して生活圏が拡大していく中で、急に観光立県を唱えて、その場その場で何かかき集めて、観光客を集めようとしても、やはり効果がありません。ではないかと思えます。

八鶴湖の周辺の素晴らしい景色が昔と比べると、若干変わってしまったのですが、将来東金地方の文化を大学と地域が協力して、一緒に考え、振興させる必要があります。東金に東京・千葉県の方だけでなく、全国の方に来ていただくために何が必要なのかということをぜひ、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。今日は、『鶴湖唱和集』という漢詩集から、八鶴湖という江戸時代の文化遺産を皆さんと考えてみました。これをきっかけに、ただ、今あるものをもって売りこむのではなく、過去のものを守りながら、これから新しいものを作り出して、この地域の文化を振興させていきたいと思えます。

以上、私の発表を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

【進行】 予定の時間まで五分ほどなんですけれども、ご質問があればお受けしたいと思います。質問のある方は挙手をお願いしたいんですけども、どなたかありますでしょうか。

【質問者一】 東金に住んでいる者なんですけれども、今日は八鶴湖に関

する明治時代の漢詩を幾つも紹介していただいて、あらためて八鶴湖の魅力に気づかされた思いがいたしました。ありがとうございます。

資料の二のほうに『鶴湖唱和集』の中の詩がございまして、韻を踏んでいると。それをあらためて踏まえて、また詩を作っていくことで敬意を表す意味があるんだとご説明がありましたけれども、見ていくと、この資料の二にあるもの、すべて同じ韻を同じ場所で踏んでいる。そういう詩なんですよ。

この漢詩を作る場がどういうものであったのか。一人の人が作って、あと次々と皆さんが順次詠んでいくのか。ちよつとその辺りの作詩の状況が、ちよつと不勉強のため分からないので教えていただけたらなと思います。以上です。

【樂】 当時は、まず漢詩人は景色を見て、それに触発されて筆を借りてとか、自分で持っている筆で、その場で書くというのが普通です。あるいはお酒を飲みながら、この景色の中、どこかに集まってお酒を飲みながら、それで、皆、詩を書くわけです。

書いた詩をその辺に掲げて、それで、唱和しようと、ほかの人たちが応えるわけです。韻を踏む人もいます。中国の詩人が決して全員、韻を踏むわけではないですけども、韻を踏むというのは当時の一つのルールといえますか、遊びです。

恐らく、遠山雲如の詩は、この周辺を観光するときに書かれたもので、地元の有の方が誰かが保存していたと思います。あとは、こういった作品を書いた後に、自分の先生に送ったりとか友だちに送ったりとか、今でもはがきに自分の言葉を印刷して送るような感じで、手紙として送るわけです。それを読んだ者は、例えば梁川星巖がこの地に来て、もう

一回、景色を見て書いたわけです。

大体、書いたものが有名な方ですと、地元の有力量者が保存するんです。それが現在残っていて、齋藤夏之助も、この序の中に書いてあるように、明治二二年のときにこの詩を集めようとしているんですね。八鶴館も出て、この地域もだんだん景色が変わるんですけども、詩がせっかくたくさんありましたので、それがなくなるともつたいないということである人にお願ひして集めたわけですね。

【進行】 よろしいでしょうか。時間ですので、もうお一方あればご質問を受けたいと思いますけれども、質問おありの方いらっしゃいますでしょうか。はい、どうぞ。

【質問者二】 私どもは、東金市内での住民で心ある方々にお集まりいただいて、東金の歴史を研究、調査をしている者です。そういうことから、ちょっとお伺いしたいことがたくさんあるんですけども、今日は時間もないということです。一点だけ。

八鶴湖を中心にしたお話を大変詳しく伺いました。八鶴湖の湖畔にあるお寺が二つね、これは有名なお寺です。昔からあるお寺です。片側に現在の県立東金高校があります。これを先生は昔の高等女学校と、そこまでは、それは間違いじゃありません。戦中は、ここは陸軍の部隊が常駐した部隊の司令部があったんです。それ以前は高等女学校だったわけです。女子高校だったわけですね。

それよりずっと以前は、徳川家康の仮御殿が建設されました。そういうことはあまり触れられませんでしたのでね。

【樂】 はい。ありがとうございます。前回、八鶴湖の周辺のお話とか、どうしてこれが出たのかという、そのときに少し触れたつもりで、

今回はちょっと省略させていただきました。確かに非常に有名ところで、そこは徳川家康の仮御殿が出来て、その後には女学校が出来たというのは、まさにそのとおりです。

ちなみに、そのときに鷹を狩りに来たわけですね。イノシシとかシカとかツルとかが、この八鶴湖周辺にたくさん出没したので当時は捕っていたというふうには。確かに狩りをするというのは一つの目的ですけども、恐らく江戸から房総半島に来るときに幕張周辺で軍事的なデモンストレーションというか、演習も兼ねていたこともあるんじゃないかなと。不勉強ながら、一応そういうふうには想像しました。

【進行】 もう時間も過ぎておりますので、今日はこれで終わりにしたいと思います。樂先生、今日はご苦勞さまでした。樂先生に拍手をお願いしたいと思います。(拍手)

長時間、皆さんありがとうございます。今日はこれで終わりにさせていただきます。

(らん でんぶ・本学国際人文学部国際交流学科准教授)